

# Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.17 No.6 June 2016

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
“きょうだい”として救援と支援を  
／高見宇造…………… 1
  - ・ 天理教教理史断章 (105)  
北野文書⑦「おさしづ」の写し翻刻  
／安井幹夫…………… 2
  - ・ 『教祖伝』探究 (24)  
反対攻撃を超える信仰  
／深谷忠一…………… 3
  - ・ 「おふでさき」天理言語学試論～「こと」  
的世界観への未来像～ (26)  
第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事  
の学」①  
／井上昭夫…………… 4
  - ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (13)  
「しゃちほこ」と「うを」の関係について②  
／佐藤孝則…………… 5
  - ・ 「おふでさき」の標石的用法 (10)  
「そうじ」について①  
／深谷耕治…………… 6
  - ・ 「おさしづ」語句の探求 (16)  
第1巻の「個人の上・事情」の伺いにお  
ける「道」  
／澤井治郎…………… 7
  - ・ 新宗教のブラジル伝道 (38)  
救済の多様性 生長の家②  
／山田政信…………… 8
  - ・ 地域福祉を拓く ー新たな寄付文化の創造  
ー (18)  
クラウドファンディング③  
／渡辺一城…………… 9
  - ・ 遺跡からのメッセージ (12)  
イギリス滞在記⑧ ストーンヘンジとそ  
のランドスケープ  
／桑原久男…………… 10
  - ・ 天理参考館から (6)  
熊本地震復興支援展示と東日本大震災復  
興支援展示  
「みちのくの郷土玩具と出土品」  
／幡鎌真理…………… 11
  - ・ ヴァチカン便り (20)  
離婚者に手を差し伸べよう  
／山口英雄…………… 12
  - ・ 霊学と現代—これからの社会と天理教 (2)  
霊長類社会から見た人間の家族  
佐藤孝則…………… 13
  - ・ 図書紹介 (95)  
『ユダヤ慈善研究』  
／八木三郎…………… 14
  - ・ English Summary…………… 15
  - ・ おやさと研究所ニュース…………… 16
- 291 回研究報告会 (金子昭) / The ANU  
Religion Conference で発表 (堀内みどり)

## 巻頭言

### “きょうだい”として救援と支援を

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

この度の「平成 28 年熊本地震」は震度 7 以上の地震が連続するというかつて経験したことのない大震災となりました。熊本県や大分県など九州の広範囲が相次いで強い揺れに見舞われ余震も相次ぎ不安の中に過しておられます。出直された方は 49 名に上り、約 2 万人 (5 月 3 日現在) の方が今なお避難生活を余儀なくされています。お出直された方々ならびに関係の皆さま方に対し、衷心よりお悔やみを申し上げます。また、被災されました方々に対し、心からお見舞いを申し上げます。天理教災害対策委員会では災害救援ひのきしん隊 (= 災救援隊) の出動を決め救援活動に当たることになりました。また広く教内の真心を集めるべく救援金を募られることになりました。

さて今回の熊本地震は本震、余震を含めて群発したことが大きな特徴だと言われていますが、こうした地震の例としては今から 160 年前に発生した「安政の大地震」があります。これは江戸時代後期の安政年間に日本各地で連発した大地震ですが、記録によれば嘉永 7 (1854) 年 6 月 15 日の伊賀上野地震を契機として、同年 11 月 4 日には安政東海地震、翌 5 日には安政南海地震と続けて発生しています。特に南海地震では当時の大和地方も含めて潰家数万、死者 1 万人と被害は甚大なものになりました。

この安政南海地震については『稿本天理教教祖伝』第三章 36 頁に次の記載があります。「嘉永七年、教祖五十七歳の時、おはるが、初産のためお屋敷へ帰って居た。その時、教祖は、『何でも彼でも、内からためしして見せるで。』と、仰せられて、腹に息を三度かけ、同じく三度撫でて置かれた。これがをびや許しの始まりである。その年十一月五日出産の当日、大地震があつて、産屋の後の壁が一坪余りも落ち掛つたが、おはるは、心も安く、いとも楽々と男の児を産んだ。人々は、をびや許しを頂いて居れば、一寸も心配はない。成程有難い事である。と、納得した。実は、おはる様

が長男亀蔵さんを出産なされた日は安政南海地震が発生した日でありました。しかしこうした大震災の最中でも、無事に出産することができたのです。もちろんこれは「をびや許し」のご守護の記述ではありますが、それにとどまらず、一心に親神にもたれて通ればたとえ震災の中であっても「一寸も心配はない」というひながたとして読み取ることが出来ないでしょうか。私は今回の熊本地震に対する力強いメッセージと受け取らせていただくとともに『教祖伝』にこうした地震の記述があることに改めて深い意義を感じました。

ところで災救援本部長は今回の救援活動にける思いについて「現地には難渋する“きょうだい”がたくさんいる。今後も自治体と連携を取り合つて救援活動を展開し、困っている被災者に、おたすけの精神で手を差し伸べていきたい」と語っています。私はこの言葉からある「おさしづ」を心に思いました。それは「兄弟なら兄弟のように、扶け合い、皆めんへの事に合わせば、皆めんへ—そうであつたらへ、人間は、かりもの分からんから。かりもの分かれば、扶け合いの心浮かむへ。」(明治 33 年 3 月 22 日補遺) というものです。「かりもの理」が心に治まれば、私たちは自然と扶け合いの心が浮かぶと言われます。

この「かりもの」の教えにあつては「たらんへ—となに事にてもこのよふわ 神のからだやしやんしてみよ」(三号 40) とあるように、「私たち人間お互いは親神様の懐住まいの中にある」という実感が求められます。それはたとえどんなに辛く悲しいことであっても、間違いなく「親神様の懐住まいの中で起こっていること」への気づきとなります。そこに思い至るとき、必ず生きたる希望が見いだせる教えであると信じます。そのためにも「かりもの」の理を知る私たちようばく、信者お互いは被災された方々の「兄弟」として救援、支援に真実を尽くさせていただきたいと思ひます。